

# 観光英語 (7) : 日本の城郭などに見られる英語案内板の 表記内容再検討と綴字についての提案

福島 一人

## Tourism English (7) : A Review of the Contents of English Signs Found in Japanese Castle Complexes etc. and the Suggestions for Their Orthography

Kazundo Fukushima

### Abstract

This paper is expected to contribute to the benefits of the people who write English signs on behalf of ordinary or general foreign tourists.

It is based on the presentation entitled “The Orthography of English Signs Found in the Japanese Castle Complexes” which was contributed to “The Japan Society of English Usage and Style” on June 28, 2014. This paper will show several developments especially in the terminology of those castles’ elements and the orthography of the English letters to which Japanese letter are transcribed. When foreigners read Japanese terms transcribed into English letters they pronounce what they read. However, the same letter “o” in different words can be pronounced differently on the present signs. For example, the “O” in “Mt. Oyama” in Kanagawa Prefecture sounds like [O:], while that in “Oyama City” in Tochigi Prefecture sounds like [O].

This paper will suggest ways of spelling Japanese words by using English letters so that Japanese as well as foreigners can pronounce them in approximately the same way even if they don’t exactly know how to read the names of those places or persons.

Because the Tokyo Olympic Games are to be held in 2020, more foreign tourists are expected to visit Japan. The English signs in Japan’s famous places and relics have to be increased in number and improved in quality.

Fukushima (2011.1), (2011.9), (2012.7), (2013.1), (2014.1) examined the examples in the Japanese castle complexes containing castle keeps designated as national treasures or important cultural properties. Fukushima (2014.7) also examined those on the Miyajima Island registered as a world cultural heritage.

### 1. はじめに

本稿は、2014年6月28日に日本英語表現学会第43回全国大会で口頭発表した「日本の城郭に見られる英語案内板の表記」に、加筆修正を加えまとめたものである。

2020年に東京でのオリンピック開催が決定し、さらなる外国人観光客の増加が見込まれ、日本の名所・旧跡においては、特に国際語である英語案内板の質的<sup>1)</sup>、量的充実が望まれるようになって

ている。このことは、日本人観光客の増加にもつながる。

福島（2011.1）（2011.7）（2012.7）（2013.1）（2014.1）では、「事例報告」として、日本の名所・旧跡に数えられる、国宝・重要文化財に指定された天守を有する12城郭の現地案内板に検討を加えてきた<sup>2)</sup>。

福島（2011.9.17）の、日本実用英語学会第36回年次大会における口頭発表「日本の城郭案内板の英語」では、以上の12城郭の部位について、参考文献、及び、現地案内板の英語表記の紹介を行った。

本稿では、以上の事例報告に基づき、他の城郭などの例も随時加えながら、現地で見られた案内板について再度検討を加える。その際、これまでの事例報告の一部について追加・修正を行う。城郭の案内板については、「城郭の部位のもの」、「当該城郭に特有なもの」、「一般的なもの」に分類する。

この追加・修正には、これまで整理してこなかった日本語の英文字表記について、福島（2014.7）の例も加えるなど、他の名所・旧跡に見られる例を加えた、新たな提案も含まれる。特に、日本の事物の英文字表記について、日本語を学習する外国人の便宜を考慮しての提案が行われる。

本稿においては、現地の案内板などの問題点にはアンダーラインを引き、追加修正などの提案は太字で記す。

## 2. 各城の案内板

### 2.1 城郭の部位の用語 ※冠詞をはずしてある。

同じ城郭内部でも、部位を表す英語の用語が複数存在する場合がある。例えば「天守」の場合、「櫓（やぐら）」の意味の“tower”が同一説明文中に存在する場合、“donjon”や“keep”を使用することがあり、案内板の作成者が異なる場合、案内板により異なることがある。可能な限り統一させる必要があると思われる。

#### 2.1.1 天守

渡邊他編（2003）（『大和英』）では、“castle tower”、“donjon”、“keep”と、市川（1989）（『和中』）では、“castle tower [keep]”、“donjon”としている。参考文献や現地の案内板の記載は、概ね、上記二冊のものに集約されていると思われる。

それぞれ、当該事物が所属する城郭名、文部科学省による指定、撮影年月、案内板で使用されている用語を挙げる。

1



2



1は、兵庫県姫路城の「天守」であり、国宝に指定されている。2009.3に撮影したものである。城郭内の案内板では、“main tower”、“main keep”、“main castle keep”とされている。2は、長野県松本城の「天守」であり、国宝に指定されている。2010.7に撮影したものである。案内板では、“main tower”と統一されている。

3



4



3は、滋賀県彦根城の「天守」であり、国宝に指定されている。2010.9のものである。城郭内の案内板では、“main tower”、“main castle tower”、“donjon”とされている。4は、愛知県犬山城の「天守」であり、国宝に指定されている。2010.5のものである。城郭内の案内板では、“central keep”、“donjon”とされている。

5



6



5は愛媛県伊予松山城の「天守」であり、重要文化財に指定されている。2011.8のものである。案内板では、“main tower”、“main castle tower”とされている。単に“castle”とされているものがあるが、誤りと言えよう。6は島根県松江城の「天守」であり、重要文化財に指定されている。2011.9のものである。案内板では、“castle tower”、“tower”とされている。

7



8



7は高知県高知城の「天守」であり、重要文化財に指定されている。2011.4のものである。案内板では、“castle keep”、“keep”とされている。8は青森県弘前城の「天守」であり、重要文化財に指定されている。2011.6のものである。数少ない案内板では、“castle tower”とされている。後述するが、南東からの外観が北西からの外観が異なることで有名である。

9



10

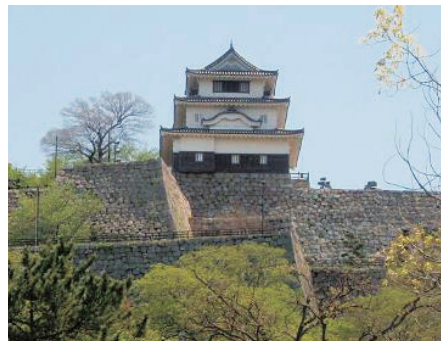


9は福井県丸岡城の「天守」であり、重要文化財に指定されている。2012.8のものである。英語案内板は存在しない。“castle keep”を福島（2013.1）では提案したが、本稿では“**castle tower**”とすることを提案する。10は愛媛県宇和島城の「天守」であり、重要文化財に指定されている。2011.8のものである。案内板では、“donjon”とされている。

11



12



11は岡山県備中松山城の「天守」であり、重要文化財に指定されている。2010.12のものである。案内板では、“donjon”、また日本語そのままに“tenshu”と表記されている。これは、イタリック体にして“*tenshu*”とすることを提案する。12は香川県丸亀城の「天守」であり、重要文化財に指定されている。2011.4の撮影である。案内板では、“castle keep”、“donjon”とされている。

本稿では、可能な限り“**castle tower**”、「大天守」に相当するものは、“**main castle tower**”と統一することを提案する。

尚、複合式天守の形式には、1の姫路城や2の松本城の如く、大天守や小天守などが一つの集合体の外観を有する「連結複合式天守」、そして、5の伊予松山城の如く、大天守や小天守などが長い廊下により接続され、それぞれ独立した外観を有する「連立複合式天守」が存在する。本稿では、前者を単に“**castle tower complex**”、後者を“**corridor-linked castle tower complex**”とすることを提案する。

## 2.1.2 小天守（こてんしゅ）

2.1.1に挙げた12城郭（以後「12城郭」）中、「小天守」が存在するものは、姫路城、松本城、伊予松山城である。

13



14



15



13は3つ存在する姫路城の「小天守」のうち、北西と西に見られるものである。3つの「小天守」は“east small tower”、“west small tower”、“northwest small tower”と、同一文章中で“main tower”「大

天守」と、明確に区別して、それぞれ方位も示し、現地の案内板に記されている。これらは、「大天守」と密着するような外観を有する、いわゆる、「連結複合式天守」の構成素である。本稿では、“main”との対照をより明確にし、“smaller”を使用し、“east smaller tower”、“west smaller tower”、“northwest smaller tower”とすることを提案する。

14は松本城の「乾（いぬい）小天守」である。案内板では、単に“lesser tower”、“minor keep”とされている。福島（2011.1）では“small tower”を提案している。「連結複合式天守」の構成素である。姫路城のものと同様、本稿では、“northwest smaller tower”とすることを提案する。

15は伊予松山城のものである。「櫓門（やぐらもん）」である「筋鉄門（すじがねもん）」上部の廊下により渡れるが、「大天守」とは独立して建造されている。案内板では、“small tower”とされている。いわゆる「連立複合式天守」の構成素である。これも、以上に合わせて、“smaller tower”とすることを提案する。

### 2.1.3 石落とし 狭間（さま・ざま・はざま）

「石落とし」については、「石落」としたり、「狭間」については、「さま」「ざま」「はざま」としたり、現地の案内板では、送り仮名・読み方が異なることがある。これら防衛上の工夫は、「天守」・「櫓」・「土塀」などに存在する。「石落とし」は、内側から敵に石などを落としたり、槍で突いたりし、「狭間」矢をはなったり、鉄砲を発射する工夫である。

16は松本城の、17は高知城の「石落とし」（16では一層・二層目の、17では一層目の突出部分）と「狭間」（17では「石落とし」の横に存在する四角い穴で、16の場合「石落とし」の部分にも存在する。）である。18は高知城天守の内側から見た「石落とし」である。

尚、宇和島城天守には、「石落とし」も「狭間」も存在しない。「泰平の代の城」と呼ばれる所以である。

16



17



18



19



19は姫路城天守までの通路に沿って幾重にも存在する土塀に見られる「狭間」である。

松本城については、「石落とし」の英語説明は表題中で“*Ishiotoshi*”とのみされている。福島（2011.1）では、“*Ishiotoshi (Stone Dropping Shelves)*”を提案している。「狭間」の現地の英語説明では、「矢狭間」、「鉄砲狭間」の意味をまとめ、“hole for shooting arrows [ firing muskets ]”としている。“*bow embrasure*”、“*gun embrasure*”を提案している。「鉄砲」は「火縄銃」のみであったので、本稿は「鉄砲狭間」を“*matchlock embrasure*”とすることを提案する。

高知城については、「石落とし」は日本語のものしか存在せず、福島(2012.7)では、表題中で“*Ishiotoshi (Stone Throwing Hole)*”を提案している。高知城では、「狭間」を“porthole”や“hole for shooting”としている。また、「隠し狭間」を“hidden porthole”としている。本稿では、説明部分を小文字とし、“*Ishiotoshi (stone throwing hole)*”とすることを提案する。

見学順路で最初に存在する場所に、「石落とし」や「狭間」について、次のような、日本語のものと独立させた英語案内板を設置することを提案する。“*Ishiotoshi (stone throwing holes) : openings through which defenders throw or drop stones on enemies, or impale them with spears*”、“*Sama (loopholes) : openings through which defenders shoot arrows or fire muskets at enemies*” 福島(2014.1)では、“*devices through which...*”としているが、本稿では、より直接的に形状を伝えるために、“*openings through which...*”とすることを提案する。

尚、「石落とし」について、姫路城では“stone throwing hole”、彦根城では、記述無し、犬山城では“place for stone dropping”、伊予松山城では“stone drop”、松江城では“outlet for dropping stones”とされている。弘前城、丸岡城、宇和島城、備中松山城、丸亀城には記述が存在しない。「狭間」について、伊予松山城の案内板では、「鉄砲狭間」を“loopholes for guns”としているが、本稿では“*loopholes for muskets*”とすることを提案する。「矢狭間」を“loopholes for shooting arrows”としている。姫路城、彦根城、犬山城、松江城、弘前城、丸岡城、宇和島城、備中松山城、丸亀城には記述が存在しない。

#### 2.1.4 櫓(やぐら)

『大和英』では、“turret”、“tower”、“keep”と、『和中』では、“turret”としている。これらを参考にしているのであろうか、現地の案内板では“turret”としている城郭が多い。本稿執筆者もこれまで、「現地のを可能な限り生かす」という基本方針により、それに従い、また、英語表記が存在しない場合、“turret”を提案してきた。

本稿では、「櫓」を“turret”ではなく、“tower”とすることを提案する。特に、21、22の如く「天守」から離れて位置するものは、Costello R.B., edit. (1991) (Random House) の“a small tower, usu. one forming part of a larger structure.”や“a small tower at an angle of a building, as of a castle or fortress, frequently beginning some distance above the ground.”という語義に相当せず、また、本稿の native check を依頼した David Martin 氏からも否定的回答を得たからである。

20



21



22



20は犬山城の「附櫓（つけやぐら）」、21は備中松山城の「二重櫓」、22は弘前城の「辰巳櫓」である。現地の案内板では、20は“attached turret”と、21は独立しては存在せず、城郭の総合案内板の中で単に“turret”と、22は日本語をローマ字化して“Tatsu Mi Yagura”としていた。本稿では、20は“*Tsuke-yagura (attached tower)*”と、21は“*Nijuu-yagura (two-story tower)*”と、22は“*Tatsumi Yagura (southeast tower)*”とすることを提案する。勿論、これらが表題などではなく、文章中に存在するのであれば、すべて小文字を使用することになる。

尚、現地の案内板では、姫路城は“turret”や“tower”と、松本城は“tower”や“keep”と、彦根城は“turret”や“tower”と、伊予松山城、高知城、宇和島城は“turret”としている。丸亀城は“watchtower”としている。

23



23は国宝・重要文化財天守を有する12城郭には入らない熊本城の、櫓群「平櫓」である。「平櫓」自体は重要文化財に指定されている。12城郭のものとは異なり、観光客の立ち位置から見て“tower”とするのには抵抗がある。20の犬山城の「附櫓」も一階建てであるが、石垣の上に存在し、観光客からすると見上げる景観を呈しているからである。「平櫓」を熊本城の案内板の表題では、“Hira Turrets”としているが、本稿では、“*Hira Yagura (one-story forts)*”とすることを提案する。

### 2.1.5 突上戸（つきあげど）突上窓（つきあげまど）

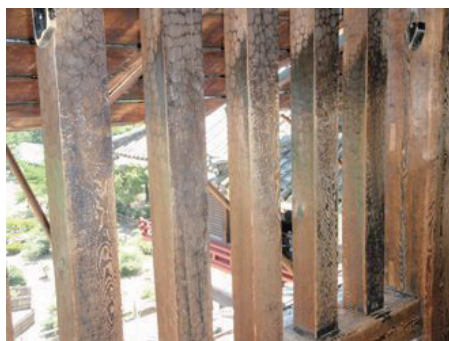
両者共、一括して「突上戸」とされていることが多い。しかし、『大和英』では、日本語説明は「突き上げ戸〔窓〕」と区分し、英語説明は一括して“overhung door”としている。福島（2014.1）では、「突上窓」について、表題において、“*Tsukiage-do (Overhang Windows or Top-hinged Swinging Windows)*”を提案している。

本稿では、「突上戸」と「突上窓」を明確に区分し、前者を“*tsukiage-do (overhung doors or top-hinged swinging doors)*”、後者を“*tsukiage-mado (overhung windows or top-hinged swinging windows)*”とすることを提案する。尚、“overhung”は“overhang”と交換可能である。勿論、表題中では、福島（2014.1）の如く、大文字で始める。

24



25





24は丸岡城の「突き上げ戸」であり、天守最上階外側の「廻縁（まわりえん）」に出入り可能である。25は松本城の「突上窓」であり、外側との出入りは不能である。一般にこれらは、天守にも櫓にも見られる。

### 2.1.6 櫓門（やぐらもん）

26



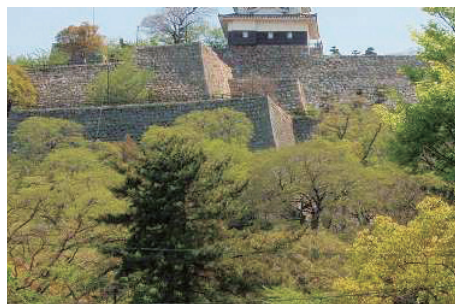
27



26は姫路城の、27は彦根城の「櫓門」である。門と櫓の機能を有する構造体である。門の上部は、敵を撃退するために内側から弓や鉄砲を発射可能な格子窓（こうしまど）などを有する構造になっている。姫路城には記述が存在せず、彦根城の案内板では、“yaguramon-gate”としている。本稿では、「櫓門」を“yagura-mon (gate house)”とすることを提案する。

### 2.1.7 石垣

28



29



28は現存天守を有する12城郭では最大の高さを誇る丸亀城の、29は伊予松山城の本壇を支える「石垣」である。丸亀城の「石垣」は三段あり、合わせた高さは40メートル近い。丸亀城、伊予松山城共に、案内板では、「石垣」を“stone wall”としている。尚、12城郭の中で、案内板で「石垣」の記述が見られる城郭は、他には彦根城であり、やはり“stone wall”としている。表題とするなら、“Ishigaki (stone wall)”とすることを提案する。

## 2.1.8 曲輪・郭（くるわ）〔丸〕

城郭の防衛上の区画を表す。12城郭の案内板では、“bailey”、“citadel”、“enclosure”、“quarter”が見られるが、“bailey”と“citadel”が多く見られるようである。12城郭ののうち、案内板で記されていたものを挙げる。

姫路城では、「西の丸」を“west bailey”と、「腰曲輪」を“waist quarter”としている。それぞれ、最初の出現に際しては、“*nishi-no-maru* (west bailey)”、“*koshi-kuruwa* (waist quarter)”と表記することを提案する。後者は前者と比べて狭い区画である。これらが同一文中に再度出現する場合、もちろん、単に“*nishi-no-maru*”や“west bailey”、“*koshi-kuruwa*”や“waist quarter”で構わない。彦根城では、「本丸」を“main enclosure”や“honmaru quarter”としている。これらは、“*hon-maru* (main enclosure)”とまとめるべきであろう。伊予松山城では、「本丸」を“main bailey”、「二の丸」を“2nd [second] bailey”、「三の丸」を“3rd [third] bailey”としている。それぞれ、最初は、“*hon-maru* (main bailey)”、“*ni-no-maru* (2nd bailey)”、“*san-no-maru* (3rd bailey)”とすることを提案する。松江城では、「二の丸」を“secondary enclosure”や“outer citadel”としている。これらは、“*ni-no-maru* (2nd citadel)”と統一することを提案する。高知城では、「本丸」を“main citadel”、「二の丸」を“second citadel”、「三の丸」を“third citadel”としている。それぞれ、最初は、“*hon-maru* (main citadel)”、“*ni-no-maru* (second citadel)”、“*san-no-maru* (third citadel)”と表記することを提案する。丸亀城では、「郭」を“citadel”、「本丸」を“inner citadel”、「二の丸」を“outer citadel”としている。それぞれ、最初は、“*kuruwa* (citadel)”、“*hon-maru* (inner citadel)”、“*ni-no-maru* (outer citadel)”と表記することを提案する。

## 2.2 当該城郭に特有なもの

12城郭に見られる特有な事物に関する説明文についてのいくつかの問題点を述べる。

福島(2011.1)～(2014.1)では、「文法的な誤りの例」、「日本語案内板、あるいは、史実などと矛盾する例」、「日本語案内板に対応する英語案内板が存在しない例」、「日本語案内板も英語案内板も存在しない例」を挙げ、修正や作成の提案を行ってきた。本稿ではこれらのいくつかを挙げ、加筆・修正を加える。

アンダーラインは本稿執筆者による。

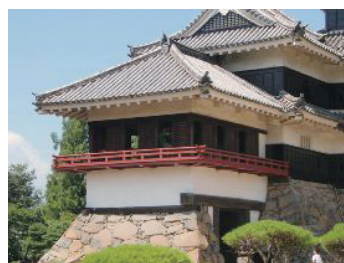
### 2.2.1 文法的な誤りの例

2.2.2 と重複する部分がある。

(1)

30は松本城の「月見櫓」である。それを囲む赤色の外縁は「回縁（まわりえん）」と呼ばれる<sup>3)</sup>。「月見櫓」の内部には「回縁へは出ないでください」を“Don't step into a verandah”としている。30のように、月見櫓を囲んでいるが「廻縁」は一つである。また、屋外に存在する。「初出の普通名詞には不定冠詞を付ける」により“a”を使用し、「…に入る」に一般的な“into”を使用したためと考えられる。“… onto the ,,,”とすべきである。尚、綴りについては、「米主英従」とし、“veranda”、また、日本語に合わせて、若干柔らかくし、“Do not step onto the veranda”とすることを提案する。

30



(2)

彦根城に見られた案内板では、「本丸の表口を固める櫓門。」という名詞句を“The *yaguramon-gate was to fortify the turret and served as the front entrance of the main enclosure.*”と文で表している。句を文で表すこと自体にはそれほど違和感を感じられない。しかし、“served”は役目を表す重要な語であり、生かすべきである。“was to fortify”は言葉足らずであり、“was used to fortify”の如く、“used”補うことを提案する。また、「本丸の表口」は、「…の」、すなわち、“of …”と考えた結果と思われる。“to…”とすべきである。従って、文全体を“The *yaguramon-gate was used to fortify the tower and served as the front entrance to the main enclosure.*”とすべきである。

(3)

やはり、彦根城に見られた案内板であるが、「この天守 (=It) は大津城 (滋賀県大津市) の天守を移築したものと伝えられている。」を“It is said to have originally the main tower of Otsu Castle ( Otsu City, Shiga ) which was moved and reconstructed.”としている。過去についての言及であるので、to-不定詞には完了相を加えるべきである。また、which 節を制限的に使用すると、「大津城の天守がかつて移築・再建された。」という誤解が生じ得る。従って、“It is said to **have originally been** the main tower of Ootsu ( Ootsu City, Shiga ) , **and to have been moved and reconstructed.**”とすることを提案する。尚、3.3.2の提案に従い、「大津」を“Ootsu”と綴る。

## 2.2.2 日本語の案内板、あるいは、史実などと矛盾する例<sup>4)</sup>

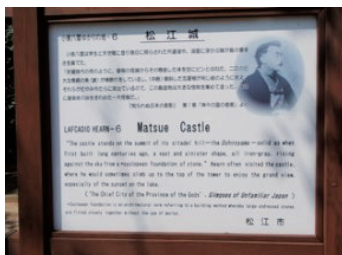
(1)

松江城で見られた案内板である。日本語案内板の「松江城は慶長12年(1607)から足かけ5年の歳月を費やして堀尾吉晴によって築かれました。」を独立した英語案内板では、“The castle (=Matsue Castle) was built in 1611 by Horio Yoshiharu who took five years (1607-1611) to complete.”としている。宝島社編(2009)(『宝島社編』)にも説明されているが、「堀尾吉晴が城の完成直前に死んだ」が史実である。また、「自分の隠居の城とする目的であった」ことは重要な情報である。従って、“**Horio Yoshiharu began to work on the construction of the castle in 1607, originally to make it a residence after his retirement. Yoshiharu died just before the castle was completed in 1611.**”とすることを提案する。

(2)

画像31は矢は松江城で見られた案内板である。32の宍道湖の沖合に存在する小島について、「文語調」で言及している。「小泉八雲は学生と天守閣に登り落日に照らされた宍道湖や、湖面に浮かぶ嫁が島の優美さを賞でた。」を“Hearn

31



32



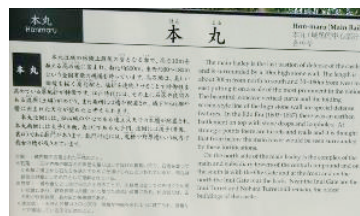
often visited the castle, where he would sometimes climb up to the top of the tower to enjoy the grand view, especially of the sunset on the lake.”としている。しかし、日本語説明は、「落日に照らされた…を賞でた。」と文語調である。その文体にあわせ、また、「学生と」も補って、“Hearn often visited the castle, where he would sometimes climb up to the top of the tower **with his students and admire the grand**

view, of Lake Shinji-ko and a small island called Yome-ga-shima in the last rays of the setting sun.” とすることを提案する。尚、福島（2014.1）では、原文の“to enjoy”をそのまま使用している。

(3)

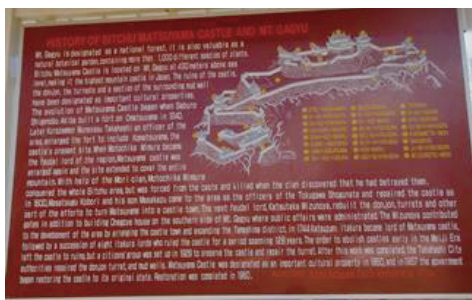
33は伊予松山城本丸の案内板である。日本語説明は、「本丸は城の最後の砦となる、郭で、高さ10mを越える高石垣に囲まれ、南北300m、東西30～180mという全国有数の規模を持っています。」という文で始まっている。これを英語説明では2つの文にし、“The main bailey is the last bastion of defense of the castle and is surrounded by a 10m high stone wall. The length is about 300m from north to south and 30 ~ 180m from west to east putting it on a scale of the most prominent in the nation.”としている。日本語説明と英語説明は内容的にはほぼ一致している。しかし、両者共に、事実とは矛盾する。「観光客が本丸に立つと、そこは高さ10mの石垣に囲まれている」、と解釈されうる。事実は、本丸は高さ10mの石垣上に存在するのである。日本語説明は「…高石垣の上に存在し…」とし、英語説明の始めの文は、“The main bailey, which is located on the foundation along the perimeter of which there are stone walls over 10m high, is the last bastion of defense of the castle.”とするべきである。また、原文中の“30～180m”は、スワンダッシュではなくダッシュを使用し、“30-180m”とするべきである。“The length”はやや冗長に感じられる。“It”で足りるであろう。

33



2.2.3 日本語案内板に対応する英語案内板が存在しない例  
(1)

34



35



備中松山城では、2010.12 現在で見られる英語案内板は、「禁煙」“NO SMOKING” 以外は、山頂の天守前広場に存在する 34 の総合案内板のみである。備中松山城の3つの重要文化財である、天守、二重櫓、土塀を表す案内板も 35 の日本語案内板のみである。35は次の如く記されている。「備中松山城 国指定史跡 備中松山城跡 国指定重要文化財 建造物 天守 建造物 二重櫓 建造物 土塀」この情報は重要と思われる。本稿では、次の英語案内板を併設することを提案する。“Nationally Designated Historical Site Site of the Bicchu Matsuyama Castle Nationally Designated Important Cultural Properties ● Tenshu ( castle tower ) ● Nijuu Yagura (two-storied tower) ● Dobei ( mud wall )”

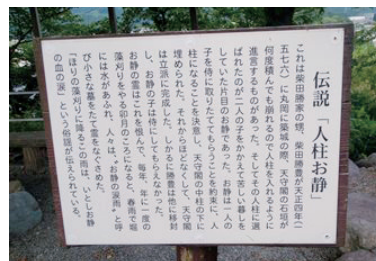
尚、福島（2012.7）では、*Tenshu*（Donjon）とし、*Nijuu Yagura*（Two-storied Turret）とした。これは34の総合案内板での記述されている「天守」“donjon”、「櫓」“turret”に合わせたものである。本稿では34においても、「天守」を“castle tower”、「櫓」を“tower”とすることを提案する。

(2)

交通の便が悪く、外国人観光客の来城を期待していないように思われる丸岡城には、2012.8 現在、日本語案内板は多く存在するが、英語案内板は天守内及び、天守が位置する本丸にさえ存在しなかった。

松本城や丸亀城の伝説の如く<sup>5)</sup>、この丸岡城に残る「人柱お静」の伝説はあまりにも有名で、36の案内板が本丸内に存在する。36の記述は以下の通りである。アンダーライン部分は、英語案内板提案に際し、特に注意した部分である。

36



### 伝説 「人柱お静」

これは柴田勝家の甥、柴田勝豊が天正四年（一五七六）に丸岡城に築城の際、天守閣の石垣が何度積んでも崩れるので人柱を入れるように進言するものがあった。そしてその人柱に選ばれたのが二人の子をかかえて苦しい暮らしをしていた片目のお静であった。お静は一人の子を侍に取り立ててもらうことを約束に、人柱になることを決意し、天守閣の中柱の下に埋められた。それからほどなくして、天守閣は立派に完成した。しかるに勝豊は他に移封し、お静の子は侍にしてもらえなかった。お静の霊はこれを恨んで、毎年、年に一度の藻刈りをやる卯月のころになると、春雨で堀には水があふれ、人々は“お静の涙雨”と呼び小さな墓をたて霊をなぐさめた。

「ほりの藻刈りに降るこの雨は、いとしお静の血の涙」という俗謡が伝えられている。

本稿では、以下の英語案内板を併設することを提案する。アンダーライン部は福島（2013.1）での提案を修正したものである。

#### Legend “O-Shizu, *Hitobashira* (human sacrifice)”

When Shibata Katsutoyo, the nephew of Shibata Katsue, was building a castle in Maruoka, the stone wall of the castle tower collapsed no matter how many times it was piled up. There was one vassal who suggested that they make someone a human sacrifice called “*Hitobashira*” in Japanese.

O-Shizu, a one-eyed woman who had two children and lived a poor life, was selected as the “*Hitobashira*.” She resolved to become one on the condition that one of her children be made a samurai.

She was buried under the central pillar of the castle tower. Soon after that the construction of the castle tower was successfully completed. But Katsutoyo was transferred to another province, and her son was not made a samurai.

Her spirit felt resentful, and made the moat overflow with spring rain when the season for cutting algae came in April every year. People called the rain “the rain caused by the tears of o-Shizu's sorrow,” and erected a small tomb to soothe her spirit.

There was a poem handed down.

“The rain which falls when the season for cutting algae comes

Is the rain reminiscent of the tears of the poor o-Shizu's sorrow”

尚、福島(2013.1)では、“O-shizu”、“Human Sacrifice”、“should make”、“castle keep”、“O-shizu’s”としていた。“O-shizu”、“O-shizu’s”について、本稿では、3.4.1で述べる通り、新村出編(2008)『広辞苑』では接頭語としている「お」を、表題や文頭では大文字、文中では小文字とし、「静」はすべて大文字で始めている。“Human Sacrifice”について、表題であっても英語説明部分は、福島(2014.7)から小文字で始めている。“should make”については、米語に一般的な“make”としている。ただし、「義務的」意味を強調したい場合、“should make”を使用することになる。「天守」“castle keep”については、本稿では可能な限り、“**castle tower**”に統一を試みる。また、“the season of cutting algae”は、より一般的な“**the season for ...**”とすることを提案する。

37は36と同じく、丸岡城本丸内に存在する、戦国時代に武将が、家族に宛てた日本一短い通信文として有名な碑である。「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」と記されている。

37



38



次の英語案内板を設置することを提案する。**Just a short note to tell you. Watch out for fire. Don't make lady o-Sen cry. Take care of the horses.**

尚、福島(2013.1)ではO-senとしている。36と同様、3.4.1で述べる通り、ハイフンを使用し、“**o-Sen**”と表記することを提案する。

38は備中松山城天守内に存在する「囲炉裏」である。籠城戦に備えてのもので、12城郭では備中松山城にのみ見られる。日本語の案内板が存在するが、その内容を簡略化し、次の英語案内板を併設することを提案する。

***Irori (hearth) The irori was constructed here for the use of defenders of the castle who might face the necessity of fighting inside the tenshu.***

尚、福島(2013.1)では、「囲炉裏」の説明部分を“Hearth”としている。

## 2.2.4 日本語案内板も英語案内板も存在しない例

39



40



39は松江城天守を支える「寄木柱」であり、40は宇和島城天守内に存在する「障子の間」であり、それぞれ、他の現存天守には類を見ない。それぞれの撮影場所付近に次のような日本語と英語の案内板を設置することを提案する。

### 寄木柱

松江城天守の柱は、寄木をして金輪でしぼり強度を増しています。他に類を見ないと言えるでしょう。

*Yosegi-bashira* ( joint wooden pillars )

The castle tower uses pillars in which lumber shafts are jointed together with clamps and bound round the outside with iron rings to increase the strength of the pillars. They are safely said to be a characteristic of the Matsue castle tower.

### 障子の間

この障子に囲まれた部屋は、天守一階と二階にあり、他の現存天守には類をみないものです。

*Shouji-no-ma* ( room of the paper sliding doors )

On each floor of the first and second stories of the donjon, there is a room with paper sliding doors all around. It is a characteristic of the Uwajima castle tower.

尚、アンダーラインの英語説明部分を、福島(2014.1)では、「寄木柱」については“Joint Wooden Pillars”と表記し、「障子の間」については“*Shouji-no-ma*”を入れず、英語の説明をそのまま表題とし、“The Room of the Paper Sliding Doors”と表記している。

41



42



41 は南東から見た弘前城天守、42 は北西から見たものである。他の現存天守には類を見ない。それぞれの撮影場所付近に 41 と 42 の画像を挿入し、次の案内板を設置することを提案する。

#### 異なる外観の天守

弘前城天守は辰巳（たつみ）の方角からの外観と乾（いぬい）の方角からの外観が異なり、他の現存天守には類を見ないものです。

**The appearance of the castle tower seen from the southeast is different from that seen from the northwest. It is a characteristic of the Hirosaki castle tower.**

### 2.3 一般的なもの

当該名所・旧跡を訪れる観光客のための、案内・必要・注意・禁止事項を表示する案内板である。

#### 2.3.1 文法的な誤り

43



44



43 は姫路城で、44 は犬山城で見られた案内板である。

43 は図案と共に、「火気厳禁」を“Flammables”、「飲食禁止」を“No Eating and Drinking”としている。福島（2011.7）では、“No Flammables”、“No Eating or Drinking”とするべき、とした。後



者については本稿でも、“No Eating or Drinking” とすべき、とする。しかし、「火気厳禁」については、本稿では「可燃物持ち込み禁止」と解釈し、“No Flammable Objects” を提案する。「火気厳禁」を、『和申』では“Caution: Flammable.”、『大和英』では“Danger: Flammable.”としている。それぞれ、「施設が燃えやすいから用心」などの意味である。小西、南出編(2007) (『ジーニアス』)も、単に“Flammables”としている。“Caution”、“Danger”などと共起しないと意味に明確さが欠けると思われる。

44は犬山城のもので、「閉門時間」を“5:00 pm”と“Leaving the castle until 5 pm”と表記している。後者を“Please leave the castle by 5 pm”とするべきである。

### 2.3.2 日本語の案内板と矛盾する例

45は姫路城のものである。「履物はビニール袋に入れてお持ち下さい。」を“Carry Your Shoes in Plastic Bag”としている。一般的に、「履物」は“shoes”とされているようであるが、ゴム草履で入ろうとした外国人を見かけたことがある。これまで、“Footwear” とすることを提案してきた。また、2.3.1の問題でもあるが、「ビニール袋」は可算名詞句であるので、“Plastic Bags” とするべきである。本稿でも、“Carry Your Footwear in Plastic Bags.” とするべき、とする。

45



46



46は弘前城天守内の展示物であるジオラマの前に存在した。「さわったり、荷物をのせたりしないで下さい」を単に“Please do not touch it”としていた。「展示物」を明確にし、「荷物をのせる」も加え、“Please do not touch or put anything on the exhibit” とすることを本稿においても提案する。

### 2.3.3 日本語案内板に対応する英語案内板存在せず

47は伊予松山城の天守(連立複合式天守)が存在する本壇の下に見られる案内板である。天守までの道のりの最後のトイレである。「天守内にお手洗はございません。」とあるのみである。注意事項を赤で表記していることは評価できる。外国人観光客のために、“There are no restrooms in the castle tower” を併記するべきである。それに合わせて、「お手洗」は“RESTROOMS” とすることを提案する。尚、国宝・重要文化財の天守内には現在使用可能なトイレは存在しない。

47



48は丸岡城本丸に見られる案内板である。2012.8現在、天守内を含め、日本語案内板は存在するが、英語案内板・説明は存在しない。48は「たき火・たばこ禁止」について、“No Open Flame”、“No Smoking”、「火気厳禁」について、

48



“No Flammable Objects”を併記することを提案する。また、天守内の「飲食禁止」、「落書き禁止」についても、“No Eating or Drinking”、“No Scribbling”を併記することを提案する。

#### 2.3.4 日本語、及び、英語案内板存在せず

12 城郭のなかには、まったく案内板が存在しない場合、あるいは、図案が存在するが、意味を理解しにくい場合がある。観光客の安全のためにも是非設置が必要な場合もある。

49



50



51



49 は 2010.12 現在、備中松山城唯一の観光客が使用可能なトイレ付近に存在する案内板である。天守まで徒歩でかなりの時間を要する。しかし、トイレについての記述は見られない。外国人、のみならず、日本人観光客のためにも、49 だけでなく、「お手洗い これより先お手洗いはありません」“Restrooms There are no restrooms beyond this point”を設置することを提案する。

50 は 2012.8 現在、丸岡城天守の石落としの前に存在する図案である。図案のみで案内板は存在しない。風通しがよく、特に夏には、観光客は座りたくなり、危険である。「危険 立ち入り禁止」“Danger Keep Off”を併記することを提案する<sup>6)</sup>。51 の図案は「火気厳禁」の意味と思われる。「火気厳禁」“No Flammable Objects”を設置することを提案する。

### 3. 日本語の英文字表記についての提案（※文章中の[表題中ではない]場合）

城郭外で見られたものも含めて、提案を行う。英文字表記は、「振り仮名」に相当するものであるべきで、外国人のみならず、日本人にとっても読み方が困難な地名等を知る表記とするべきである。特に、未知の土地の道路標識は運転手にとって重要である。また、当該表記は日本語の意味的理解の一助になるべきものであろう。

現在のところ、案内板の書式についての記述に関して、以下の5点に着目し、提案を行うことが可能である。今後、現地の案内板の用例をさらに挙げ、検討を加えることが要求される。

- 人名・地名など固有名詞はローマン体、建築物・造形物、公園などの固有名詞や普通名詞はイタリック体にする。
- 大文字・小文字の使用については、普通名詞であっても、強調したい場合、文章中でもすべて大文字にすることがある。

- [ ] は、「交換可能」、( ) は、「省略可能」あるいは「付加説明」とする。
- 日本語を学習する外国人学習者が日本製ワープロで記録できるように、ワープロの「ローマ字入力」に相当する英文字を原則として表記する。
- 意味に基づいて分節した構成素をハイフンで連結させる。

### 3.1 書体

表記ににくいのであろうか、イタリック体を交えている英語案内板の数は少ない。52は、犬山市に存在する「有楽園（うらくえん）」と庭園内の「如庵（じょあん）」の案内板である。“Uraku-en”、“Jo-an”と、イタリック体を使用している。外国人観光客が日本語の施設名であることを理解し易いようにしていると思われる。これに倣い、他の名所旧跡の案内板においても積極的にイタリック体を使用することを提案する。筆者は（2011.1）以来、地名・人名など固有名詞を除いて、イタリック体を用いることを提案してきた。

さらに、本稿においては、地名・人名ではないこれら施設名などは、文章中においては文頭以外は小文字で始めることを提案する。

52



### 3.2 [ ]と( )の使用

本稿で挙げた『和中』、『大和英』を含め、一般的に、辞書の表記では、[ ] は「交換可能」を、( ) は「省略可能」を表す。

筆者は（2011.1）以来、[ ] は、辞書の表記に従って、「交換可能」としてきた。そして、これには、日本語名詞の一部の一語による英語説明も含まれる。二語以上の場合にも [ ] 内に表記してきた。しかし、本稿では、[ ] は一語、そして、( ) は二語以上による英語説明とすることを提案する。

従って、52の“Uraku-en Garden”は“Uraku-en [-garden]”と、“Jo-an Tea Ceremony House”は“Jo-an (-tea ceremony house)”とすることを提案する。また、表題中であっても、英語説明部分は小文字で始めることを提案する。

### 3.3 「おう」「おお」「ず」「づ」などの表記

#### 3.3.1 「おう」

現地の案内板では、「おう」を“o”と表記されているものが多い。“ou”と表記することを提案する。

53



54



53は岡山後樂園（おかやまこうらくえん）、54は「日光東照宮（にっこうとうしょうぐう）、55は鹿児島市、「西郷隆盛（さいごうたかもり）」銅像の案内板である。“…**KOURAKUEN** …”、“**Nikkou Toushouguu** …”、“…**Saigou Takamori**”とすることを提案する。

55



また、56の中尊寺「旧覆堂（きゅうおおいどう）」、「経蔵（きょうぞう）」の如く、二重母音の「おう」、「おお」が、一律に、“o”の上に“ー”を付けて、表記されている場合がある。しかし、この発音表記はワープロに記録しにくいし、平仮名にして長音表記が存在する日本の人名地名など固有名詞は極めて少ない。人名・施設名などにそれが存在する場合、本稿では、“o”の後に“h”を続けることを提案する。例えば、下関市唐戸「カモンワーフ」については、“**Kamon-wahfu**”とすることを提案する。ハイフンは、3.4の通り音節区分の標識として使用するので、避ける。

56



尚、完全に英語化している「神道（しんとう）」などについては、「信徒（しんと）」などと共起していない限り、英語化した綴りを使用し、“shinto”とすることを提案する。

「旧覆堂（きゅうおおいどう）」、「経蔵（きょうぞう）」は、“**Kyuu-oidou**”、“**Kyouzou**”とすることを提案する。

### 3.3.2 「おお」

現地の案内板では、「おお」を「おう」と同じく、“o”と表記されているものが多い。“oo”と表記することを提案する。

57は、神奈川県、「大山（おおやま）」（行き）ケーブルカー、58は、島原市「大野木場（おおのこば）小学校」、59は、鹿児島市「大久保（おおくぼ）利通」像の案内板である。それぞれ、“**OYAMA**”、“**Onokoba Elementary School**”、“**Okubo Toshimichi**”としている。神奈川県大山について、“**OYAMA**”では、栃木県「小山（おやま）」市と同一になる。本稿では、“**OOYAMA**”、“**Oonokoba** …”、“**Ookubo** …”とすることを提案する。

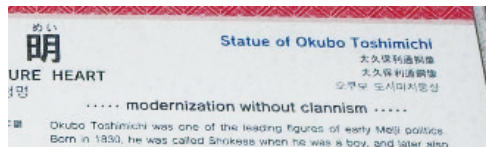
57



58



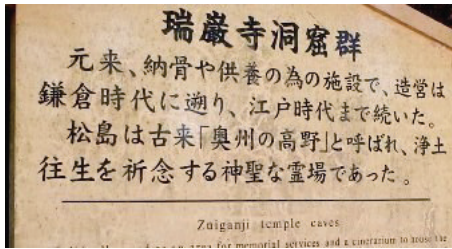
59



### 3.3.3 「ず」

“zu”とすることを提案する。但し、ほとんどの案内板が“z”の後に母音を置き、“zu”と表記されていると思われる。60は宮城県松島町「瑞巖寺（ずいがんじ）洞窟群」、61は熊本城の「不開門（あかずのもん）」の案内板である。“Zuiganji …”、“Akazuno …”、すなわち、“zu”と表記されている。

60



61



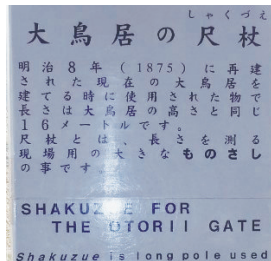
しかし、自動車雑誌 *JAF MATE* に掲載された記事中に、「絆（きずな）」を“KIDUNA”としている例が見られた。これは、「絆」の振り仮名を「きづな」と誤解したことによると思われる。“KIZUNA”とするべきであろう。

### 3.3.4 「づ」

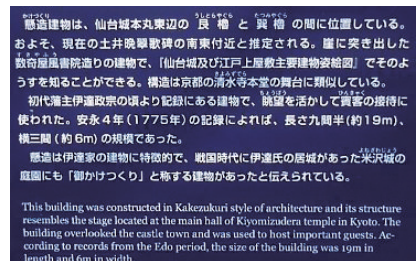
62



63



64



62は京都府「舞鶴（まいづる）」引揚記念館の、63は広島県宮島大鳥居「尺杖（しゃくづえ）」の、64は宮城県仙台城「懸造（かけづくり）」跡の案内板である。それぞれ、“MAIZURU”、“SHAKUZUE”、“Kakezukuri”とされている。「ず」と同じ英文字綴りである。

しかし、「づ」は、「ず」と音声上異なる。英文字表記は区別すべき、と思われる。福島(2014.7)では、「づ」の英文字表記を“du”とすることを提案した。しかし、この表記では、「ドゥ」と発音され、本来の日本語の振り仮名、発音とは異なる。「づ」については、発音を優先し、ローマ字入力の際の文字を補足する表記を行い、“dzu [du]”とすることを提案する。

従って、本稿では、“MAIDZU [DU] RU”、“SHAKUDZU [DU] E”、“Kakedzu [du] kuri”とすることを提案する。

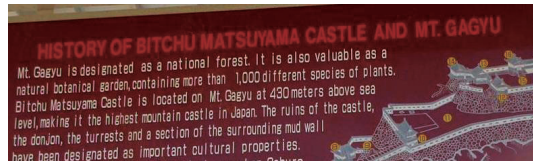
その他、「ちゅう」などに対する現地の案内板と異なる英文字表記についての提案がある。

65 は前述の備中松山城天守唯一の英語案内板である。

「備中松山城」を“Bitchu Matsuyama Castle”としている。福島（2012.7）と同様、“Bicchuu Matsuyama Castle”とすることを提案する。

「ちゅう」の他にもいくつかの提案があるが、それらについては次の機会に述べたい。

65



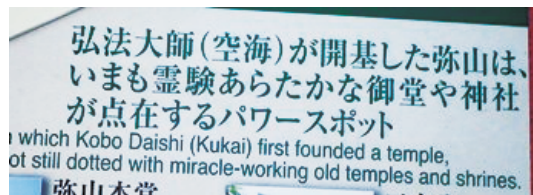
### 3.4 ハイフンの使用

日本語の外国人学習者のため、複合語については、意味に基づいて分節した構成素をハイフンで連結させる。綴字については、3.1 や 3.2 や 3.3 の提案に従う。特に、日本語の接尾語 [ 辞 ] や名詞など複合語の構成素について、1 語で英語説明可能なものは [ ] で表記し、2 語以上での説明には ( ) で表記することを提案する。

#### 3.4.1 接頭語 [ 辞 ] + 名詞 名詞 + 接尾語 [ 辞 ]

2.2.3 の「人柱お静」英語案内板の提案でも挙げたが、女性名「お静」を“o-Shizu”とする。主要語である固有名詞「静」は、大文字で始め、副次語である接頭語「お」は小文字で表記することを提案する。尚、Hearn は *Kwaidan* の ‘THE STORY OF O-TEI’ 中で、文中でも“O-Tei”としている。本稿では、「お」が副次語であり、「てい」が主要語であることを明確にするため“o-Tei”とすることを提案する。また、同小説中で、敬称を意味する接尾語「さま」を加えて“Nagao-Sama”としている。本稿では、副次語である「さま」を同様に小文字で始め、文中・文頭共に、“Nagao-sama”とすることを提案する。

66



66 は、「弘法大師」を“Kobo Daishi”としている。『広辞苑』によれば、「大師」は高德の僧に対する敬称である。本稿では、これも一種の接尾語と考え、英語説明も加え、“Koubou-daishi [-patriarch]”とすることを提案する。

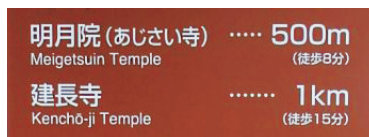
#### 3.4.2 名詞 + 名詞

67 は、2014.1.31 に NHK 総合で放映された観光庁指針の具体例の一つである。複合固有名詞構造である「清水寺」を“Kiyomizu-dera Temple”としている。本稿では、“-dera”が、構成素である「寺」の意味であることをより明確にするため、“Kiyomizu-dera [-temple]”とすることを提案する。尚、3.1 に従い、「清水寺」は地名・人名ではないので、英文字はローマン体で表記する。68 は北

67



68



69



鎌倉駅構内に存在する案内板の記述である。「建長寺」を“Kencho-ji Temple”と、「明月院」を“Meigetsuin Temple”としている。後者については、北鎌倉駅構内の別な案内板では“Meigetsu-in Temple”としており、統一されていない。尚、『広辞苑』によると、この場合の「院」は「寺」を意味する。本稿では、これらも同様に、“*Kencho-ji [-temple]*”、“*Meigetsu-in [-temple]*”と表記することを提案する。69は、広島県宮島の弥山（みせん）山頂付近行きロープウェイの乗車駅に存在する。同一案内板中で、山頂付近の同種の建造物を表す。固有名詞構造の構成素が交換されている例である。「弥山本堂」、「三鬼堂」を“Misenhondo Hall”、“Sankido Hall”としている。これらを“*Misen Hon-dou (main hall)*”、“*Sanki-dou [-hall]*”とすることを提案する。

### 3.4.3 名詞+格助詞+名詞

城郭には、「二の門」、「三の門」という名称の門を有するものがある。これらの構成素の「の」は、「門」の内容を限定する格助詞である。それぞれ、“*ni-no-mon (second gate)*”、“*san-no-mon (third gate)*”と表記することを提案する。尚、3.4.2に該当すると思われる、格助詞を使用していない「大手門」は、“*oote-mon (main gate)*”と表記することになる。

## 4. おわりに

本稿も、案内板の作成業者などを対象読者とした事例報告である。論文の文体は、これまで通り、可能な限り平易なものとすることに努めた。

「社会言語学上の言語サービスに相当する」<sup>7)</sup>と思われる案内板の対象読者は一般観光客である。従って、本稿で提案する英語は、一般人にとって簡潔・明瞭なものを目指している。もちろん、この英語は所謂「知識人」の英語とほぼ共通している。

城郭の事物の用語について、特に、「天守」、「櫓」について、12城郭では用語の統一はされていなかった。「天守」を“*castle tower*”、「小天守」を“*smaller tower*”とし、天守から離れて建設されている「櫓」を“*tower*”と、可能な限り統一することを提案する。

案内板の内容について、「城郭特有な事物」に関する案内板では、表題に加えて説明文が存在する。2.2.2の松江城のハーンに関する記述にも挙げたが、「城郭特有な事物」の案内板の英語は、「一般的なもの」と多少異なり、日本語案内板とのある程度の文体的統一などにも考慮するべきである。この点、両者の間の英語には差異が存在する、と言える。

綴字については、簡潔・明瞭性、そして、視覚上の認識の容易さにも考慮しなければならない。特に「一般的なもの」については一般の綴字法に従わないことが多い。強調の置き方により、文章中の特定の単語がすべて大文字綴りのこともある。但し、本稿では基本的に、地名・人名を表す固有名詞は大文字で始め、あとは小文字、そして、その他については小文字で始めることを提案している。

また、地名の英文字表記について、特に車の道路標識においては、日本語と英文字が併記されている案内板が多く存在する。日本語に振り仮名を加えることがスペースの関係で困難なことが多い。従って、英文字表記は日本人にとっても当該地名の読み方を知る上でも重要である。また、日本語を学習する外国人が日本製ワープロで記録する上での便宜性とある程度通じるものであることが期待される。振り仮名の「おお」に相当するも英文字表記は“oo”と、「おう」に相当するものは“ou”と、綴ることを提案する。

これら綴字については、今後さらに多くの具体例を加えて次の機会に検討を重ねたい。

本稿執筆に際して、早稲田大学名誉教授篠田義明氏、琉球大学名誉教授上地安貞氏、青山学院大学名誉教授秋山武清氏、中央学院大学教授中畑繁氏には貴重なご意見をいただいた。

これまでの6稿と同様、本稿についても、ネイティブチェックはDavid Martin氏にお願いした。感謝したい。

## 註

- 1) 格調が高いことより、一般人が理解しやすいことに重点を置き、綴字法などの規則性は一般文書ほど強くない。また、設置位置、色彩など、「視覚的認識の容易さ」も含まれる。
- 2) 「国宝姫路城」とは「天守が国宝である姫路城」の意味。
- 3) 「廻縁」と表記されることもある。
- 4) 総じて、英語案内板は日本語案内板を概略していることが多い。この場合、本稿では「矛盾する例」とはしない。
- 5) 『宝島社編』によると、松本城には、江戸時代に庄屋加助の呪いにより天守が傾いた、という伝説が残る。現地の案内板によると、丸亀城には、高石垣を築いた羽坂重三郎が秘密保持のために殺された、という伝説が残る。
- 6) 福島（2013.1）では、“Keep Out”とした。屋内から「石落し」の部分に身体を出すことを禁じるものであるので、本稿では“Keep Off”とすることを提案する。
- 7) 日本英語表現学会第43回全国大会において、筆者の口頭発表の司会を務められた、琉球大学名誉教授の上地安貞氏のコメントである。

## 参考文献

- Collick R.M.V.、日南田一男、田辺宗一編（1995）『新和英中辞典』第4版、東京：研究社
- Costello R. B., edit. (1991) *Random House Webster's College Dictionary*, Random House, Inc., New York. (*Random House*)
- 福島一人（2008.3）「形容詞 'big' 'little' と 'large' 'small' の語法：The Color Purple と Forrest Gump の用例を中心に」『言語と文化』創立20周年記念号、越谷：文教大学大学院言語文化研究所
- （2011.1）「観光英語（1）：国宝天守をもつ松本城の案内板の英語」『情報研究』第44号、茅ヶ崎：文教大学情報学部
- （2011.7）「観光英語（2）：国宝天守をもつ、松本城案内板の英語と比較した姫路城、彦根城、犬山城の案内板の英語」『情報研究』第45号、茅ヶ崎：文教大学情報学部
- （2012.7）「観光英語（3）：重要文化財の天守を有する備中松山城、丸亀城、高知城、弘前城の案内板の英語」『情報研究』第47号、茅ヶ崎：文教大学情報学部
- （2013.1）「観光英語（4）：重要文化財の天守を有する丸岡城の案内板の英語」『情報研究』第48号、茅ヶ崎：文教大学情報学部
- （2014.1）「観光英語（5）：重要文化財の天守を有する宇和島城、伊予松山城、松江城の案内板の英語」『情報研究』第50号、茅ヶ崎：文教大学情報学部



- (2014.7) 「観光英語 (6) : 世界遺産に登録されている広島県宮島の案内板の英語」『情報研究』第51号、茅ヶ崎：文教大学情報学部
- 花本金吾、野村恵造他編 (2003) 『旺文社レクシス英和辞典』、東京：旺文社
- Hearn, Lafcadio (1932) *Kwaidan*, 東京：審美書院
- 市川繁治郎 (1989) 『新和英中辞典』第3版、東京：研究社 (『和中』)
- 市川繁治郎他編 (1995) 『新編英和活用大辞典』、東京：研究社 (『新編活用』)
- インターナショナル・インターンシップ・プログラムズ (2008) 『日本まるごと事典』第2版、東京：講談社インターナショナル
- 石井隆之 (2009) 『日本の都道府県の知識と英語を身につける』、東京：ベレ書房
- キノシタ・ジュン、バレフスキー・ニコラス (2004) 『最新改訂版 日本旅行ガイド』、東京：講談社
- 新村出編 (2008) 『広辞苑』第6版、東京：岩波書店 (『広辞苑』)
- 小西友七、南出康也編 (2007) 『ジーニアス英和辞典』第4版、東京：大修館 (『ジーニアス』)
- 『司馬遼太郎と城を歩く』製作委員会 (2008) 『司馬遼太郎と城を歩く [NHK DVD]』、東京：NHKエンタープライズ
- 篠田義明 (1989) 『アメリカ英語最新ビジュアル辞典』、東京：研究社
- スクリーチ・タイモン、プライス・マーガレット、大島 明他編 (1999) 『トレンド英語日本図解辞典』、東京：小学館
- 宝島社編 (2009) 『日本の名城現存十二天守 [DVD-BOX]』、東京：宝島社 (『宝島社編』)
- 植田一三、植田敏子 (2009) 『英語で説明する日本の文化』、東京：語研
- 渡邊敏郎他編 (2003) 『新和英大辞典』第5版、東京：研究社 (『大和英』)

## U R L

「観光英語 (1)」『情報研究』44号

<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=BKSJ440004>

「観光英語 (2)」『情報研究』45号

<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=BKSJ450003>

「観光英語 (3)」『情報研究』47号

<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=BKSJ470003>

「観光英語 (4)」『情報研究』48号

<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=BKSJ480005>

「観光英語 (5)」『情報研究』50号

<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=BKSJ500004>

「観光英語 (6)」『情報研究』51号

<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=BKSJ510002>